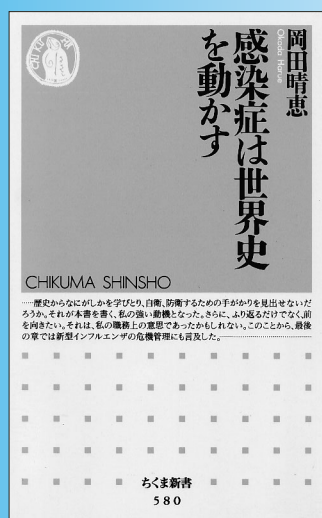


まるでその時代にタイムスリップしたかのような感染症が流行する臨場感

【評者】村下 伯 島根県健康福祉部医療対策課

感染症は世界史を動かす

岡田晴恵(著)



定価 861 円(本体 820 円+税 5%)
新書判, 286 ページ
筑摩書房(Tel.048-651-0053)

最近、新書がブームだという。ともすればさまざまな情報が断片的に飛び交う日々の生活のなかで、事柄の本質とその背景をしっかりと捉えたいうえで、これからの日々をどう生活していったらよいかを見いだしたいという思いが、人々が新書を手にする理由のひとつではないかと思う。

今回紹介する「感染症は世界史を動かす」は、公衆衛生の視点を併せもった感染症の専門家である著者が、これまで世界を席卷した感染症とこれがもたらした社会生活への影響、そして当時の人々がこうした感染症にどのように対処してきたかについて、豊富な知識と鋭い感性で解き明かした新書本である。そして、出現が秒読み段階とも言われている新型インフルエンザなどの新手の感染症に対し、どう対処していったらよいかを考えるきっかけを与えてくれる内容となっている。

本書では、中世から現代にかけて世界的に猛威をふるった感染症としてハンセン病、ペスト、梅毒、結核、インフルエンザが取り上げられている。そして、これらの感染症がなぜ世界中に広がっていくこととなったのかについて丁寧に考察するとともに、感染症の流行によって人々の日々の社会生活がどう変化したかを数多くの歴史的文献をひもときながら克明に描いている。読み進めていくうちに、まるでその時代にタイムスリップして体験しているような臨場感でもって感染症の流行の様子が伝わってくる。あっという間に感染が広がり次々と死んでいく街の人々、患者を忌み嫌い外出を恐れ、恐怖からパニック状態を起こす市民たち、交通機関の運転手は職務を放棄し、経済活動はストップして食糧不足となり、街の秩序は乱れ無法と化す…。

もちろん、細菌やウイルスの特徴、症状や重症度についても解説し、感染症が世界的に蔓延した背景を公衆衛生学的視点も含め科学的に考察していることは言うまでもない。また、最後の章では新型インフルエンザの危機管理についても解説されている。

人類にとって、感染症は逃れることのできない疾患であり、その時代その時代において、なにかしらの新しい感染症と対峙することは避けられない。本書を読み終えると、たとえば新型インフルエンザが出現した場合、社会生活全般にわたって計り知れない多大な影響を及ぼすことが現実味をもって理解でき、対処すべき事柄がいかに多岐にわたっているかに気づかされる。同時に改めて、公衆衛生活動の領域がいかに広い範疇を対象としているかということも思い知らされる。

まさに、公衆衛生従事者にお勧めすべき「新書本」である。